

聞き書き 私の戦争体験 連載 ②

前号から連載を始めた「戦争体験聞き語り」の第2回は、中国に派兵されて戦争を体験された助友和次さん(高萩市在住)からお話をお聞きしました。本紙には要約を紹介し、全文は今秋発行予定の冊子に掲載します。

「戦争は本当にむごく残酷なもの」

〔高萩市・助友和次さん(85歳)のお話・要約〕

兵隊志願

満州事変、支那事変、やがて大東亜戦争へと時代が進む中で、私自身も軍国少年に育っていました。昭和16年12月8日の真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まったときは大学生でしたが、それを否応なしに受け入れ、いずれ戦争に行かなければならないと思っていました。

当時、大学生は徴兵は猶予されていましたが、私がちょうど予科を終えたころ、文科系学生の徴兵猶予は無くなるという話が出ました。そこで志願し、18年早々に習志野騎兵第14

連隊に騎兵として入隊しました。

「18年2月1日に東京駅集合」の文書がきましたが、そこには「騎兵第1乙種・助友和次 習志野騎兵14連隊」と記されていました。連隊はすでに戦場に行っていたので現地入隊ですが、東京35区(当時)から選抜された350人余りが東京駅へ集合し、列車で大阪へ行きました。1中隊あたり50数名の編成で、



バレーボールに熱中していた18歳の助友さん(左)

将校1人、軍曹・伍長3人くらいでした。引率の軍曹に連れられて下関へ行き、そこから船に乗って朝鮮に渡りました。朝鮮からは列車にりましたが、2週間くらいであの万里の長城を初めて間近に見たわけです。

蒙古高原で

着いたところは北支最北端の包頭市(現在の華北省最北端)で、そこから戦車や自動車、馬に乗ってさらに進み、2日ほどかけて蒙古のウランバートル(現在はモンゴル共和国首都)に着きました。そこで初めて原隊に入隊できました。

騎兵連隊とはいえ、実際は機動部隊で、正式には戦車第3師団騎兵第17連隊第6中隊ということでした。将来のソ連軍侵攻に備えた戦車師団で、歩兵部隊の援護が主でした。しかし、私たちがいたところは野原と山岳地帯で、戦車部隊の苦労は並大抵ではありませんでした。というのは、敵軍(中国共産党に率いられた八路軍)は、冬の夜間は零下何十度にもなって戦車が凍って動けなくなることを知っていますので、本当によく撃ってきました。私たちはトーチランプのバーナーで温めてエンジンをかけますが、そんなことをしている間に敵は攻撃を終えてさっさと逃げて行きます。八路軍はしぶとかったですね。

渡河作戦

19年初頭に第2次河南作戦(黄河の南側への作戦)があり、黄河を渡ると霸王城がありましたので「霸王城作戦」と言いました。4月18日の朝5時に総攻撃



憲法改悪を企む人達は、異口同音に“憲法は外国から押しつけられた”と言います。真相は…。映画「日本の青空」は、戦後間もなく、鈴木安蔵氏(後に静岡大学教授)など民間人による「憲法研究会」が作成した憲法草案が、実はGHQ案のお手本となっていた事実を明らかにしていきます。

No.3

07.07.20

北茨城・九条の会 ニュース

発行：北茨城・九条の会(準備会)

連絡先：46-5611(藤田)
42-2462(鈴木)

<http://www.suzuki31.com/9-ktib>

「北茨城・九条の会」に賛同いただいた皆さんお届けします。お知り合いにも広げて下さい。話題やご意見お待ちします。

の命令がありましたが、敵軍(中央軍)は情報網がしっかりしてしまっていたので、前夜からボンボン撃って来ていました。上官から「助友、兵隊を1個分隊連れてどこそこへ偵察に行つて来い」と命令が出て、1個分隊(12人程度の編成)を連れて、黄河沿いの敵軍の展開状況を調べる偵察に行きました。敵軍は右に左にビュンビュンと撃ってくるので、あの時は、背筋がぞつとして本当に生きた心地がしませんでした。(裏面につづく)

大澤 豊 監督 作品 主演 高橋和也 藤谷美紀

8月26日(日)午後2時(ほぼ2時間、1回のみ)

日立市民会館大ホール

上映前トーク 午後1時20分より

「平和を実現するキリスト者ネット」鈴木伶子さん

主催 映画サークル日立(0294-37-5306 永井)

前売券 一般1200円 シニア・身障者・学生1000円

高中小学生800円(当日券は各200円増)

前売券は、北茨城・九条の会(準備会)でも取り扱っています。

朝5時になって、ドーンドーンと大きな砲声が上がって戦闘が始まりました。敵軍は戦車の弱点をよく知っていて壕を掘っていたので、私たち戦車部隊は、塹壕みたいな深い壕にはまって戦車は役に立ちません。私たちも戦車部隊の一部を残して、歩兵と一緒に鉄砲を担いで進みました。ところが、敵軍は私たちが攻め始めると、すばやく雲を霞みにと姿を消してしまいました。これは、それまでの中で最も恐い思いをした作戦でした。

むごく残酷

私の中国での戦闘は47回にも及ぶものですが、その一つに、郊外に中国三大石窟群の一つ「竜門石窟」がある洛陽に向けた作戦がありました。古都でもあり、軍部も考えて、周りから敵軍を追い払い、文化財だけを残すことにしました。

ところが、私たち戦車部隊が洛陽の郊外で敵軍に囲まれ、身動きできなくなりました。戦車の中は安全のようですが、敵軍に蓋を開けられて手榴弾を投げ込まれるととても危険です。そこで、やむを得ず戦車から脱出して民家に逃げ込みました。民家も屋根から手榴弾を投げ込まれて、ずいぶん日本兵は殺されました。私たちの中隊は50数人で、2個小隊25人くらいで一つの建物に入ったのですが、屋根から手榴弾を落とされ、あわや全滅という目に遭いました。斥候が友軍に連絡をしてくれて、友軍が駆けつけてドーンと砲声を1発鳴らすと、敵軍は波が引くようにいなくなりました。そのときは「生きていたんだ!」「助かったんだ!」という気持ちだけがこみ上げてきました。味方でも、瀕死の状態で明らかに助からない兵隊が苦しんでいますと、銃で安楽死させる場面を幾度か見

訃報 「北茨城・九条の会」の設立を呼びかけて尽力されてきた齊藤寿夫さんが、さる6月20日、病気により急逝されました。享年65歳。生前の平和活動への貢献に深謝するとともに、私たちは遺志を引き継いで憲法九条を守るためにがんばっていきたいと思います。

ました。戦争というのは、本当にむごく残酷なものだとつくづく思います。

軍を再編成して兵隊も戦車も数が揃って山に陣取っていると、**敗戦** きでした。夜が明けると、敵軍の方に白旗が揚がっているのが見えました。敵軍が「負けた」というつもりで白旗を出したのかと思ったのですが、そうではなく、「日本は負けたのだから、お前達はもう戦争する必要はない。帰るんだ」ということを、通訳を連れて伝達に来ました。私たちの方は知らされていませんでしたが、通信網は敵軍の方が発達しており、彼らはいち早く日本が負けたことを知っていたのです。

日本の支那派遣軍最高司令官岡村寧次大將は「日本は負けたというけれども、我々は負けたわけではない」と言い、8月15日以降も次の作戦に向けてまだ移動していましたが、結局、最高司令官は日本へ帰ってしまいました。

残された私たち兵隊は「日本は負けた。我々はどうしたらいいのか」と右往左往しましたが、ソ連軍が参戦したという知らせも入ってきました。私たち戦車部隊は、ソ連軍参戦に備えて北京へ行くのだということになりました。

北京へは列車で9月の初めに着きましたが、そこで、「日本は負けた。支那派遣軍は解散だ」と告げられました。内地へ帰る準備をすることになり、そのときは本当にホッとしました。日本が戦争に勝った、負けたということではなく、「ああ、これで撃ち合いをしなくて済むんだ」ということがどれだけ心の安らぎになったことでしょうか。そのときの安堵感はいいようがありません。勝った、負けたではなく、戦争が終わったことだけで十分でした。

私たちは、広島・長崎の原爆投下や東京大空襲がどれほど酷いものであったかなどはまったく知りませんでした。船で向こうを出たのが11月26日、佐世保に着いたのが12月2日でした。

戦争に行かなかった人、戦争を体験しなかった人、ただ思想の世界に生きてきた人だけが「憲法九条を変えよう」などと言っていますが、これは絶

ガンジー主義

対にいけないことです。武器を持つこと自体が悪の行為です。軍隊経験のない人、戦争体験のない人に、この惨めさ、愚かさはわかりません。軍隊というところは、人を人とは思わない、ただ人間の皮をかぶったひどいところですよ。

満州事変、支那事変のいずれも、日本が仕

掛けておいて、逆に中国のせいになりました。とんでもない話です。勝手に満州に入り、一つの国を作り上げてしまいました。終戦間際に、ソ連軍が条約に違反して勝手に攻めて来て、カムチャッカとか千島列島とか、漁業資源、海の資源の豊かなところを占領しました。これ自体は大変不当ですが、同じようなことを日本がしてきたのです。

平和であることが一番です。人間同士で殺し合いをすることほど愚かなことはありません。今の人たちが知ったかぶりして、我が物顔で「憲法9条を改正して、外から攻めて来るのに備えよう」などと言っていることは本当に愚かなことです。

私はガンジーの無抵抗主義でよいと思います。人間に心がある限り、善悪とすることを判断できます。人間の持つ善悪という心で行動すべきだと思います。



復員直後の助友さん(25歳)

